楠が祟るのか

坂根義範

横浜に越してきて既に二年以上が過ぎた。

数年前、神戸に丸二年住んでいたことがあるので、日本を代表する二つの港町で二シーズンずつ過ごしたことになる。

横浜も神戸も、幕末の同時期に開港し、外国人居留地が設けられ、今でも異人館やミッションスクールなど異国情緒を漂わせるものを数多く残している。これらに隣接して元町と呼ばれるエリアや中華街があり、海岸近くに展望タワーを有するほか、昔からジャズが盛んであるなど、共通点を挙げれば切りがない。

面白いところでは、両者とも、その中に県を抱えている。横浜市には神奈川区、神戸市には兵庫区という行政区画が存在する。

もちろん、両者には異なる点も多い。中でも、私にとって意味のある違いは、そそり立つ山の有無だ。

神戸の繁華街、例えば三宮界隈を歩いていて、ふと見上げると、六甲の山々に視界を遮られる。それほど近くまで山が迫っているのだ。新幹線の新神戸駅がトンネルを出た山あいに立地してるのをご存知の方も多いだろう。

横浜も大都市にしては山や緑に恵まれている方だが、お隣の鎌倉との境をなす山々を含めても、標高一〇〇メートル台の小峰がいくつかある程度である。

神戸の後背地である六甲には、標高七〇〇～九〇〇メートルの峰々が連なっている。崖状になった裾野、つまり六甲の崖下からすぐに神戸の市街地が始まっているので、街中から見ると、六甲の山並みが屏風のように感じられる。まさに、そそり立つというイメージそのもの

なのである。

八〇〇年余り前、源義経らは、この崖を駆け下りて戦をものにした。一ノ谷の合戦の大勢を決した鵯越の坂落しは、義経の華々しい活躍の中でも特に際立っている。

だが、肝心の坂落しの舞台がどこであったのか、意外にも明らかではない。義経らが駆け下りた崖の場所は、今では判然としないのである。彼にまつわる話の大半は伝説の域を出ないとも言われており、鵯越の坂落しも果たして史実であったのかどうか疑う向きさえある。

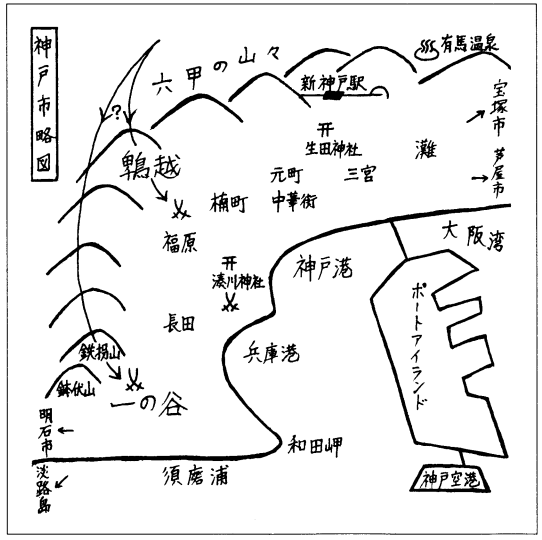
『平家物語』の「坂落」の段では、

……九郎御曹司搦手にまはって、七日の日の明ぼのに、一の谷のうしろ、鵯越にうちあがり、すでにおとさんとし給ふに……

と描かれているので、義経らは、鵯越の崖を駆け下り、崖下にある一ノ谷へ出たことになる。

現在、神戸市兵庫区には、鵯越町や鵯越筋、源平町といった地名が残っている。この辺りの崖状の土地を這い上るようにして神戸電鉄が走り、山の裏側にある有馬温泉へ通じている。崖の上の台地は、ひよどり台であり、ひよどりごえ森林公園の緑が広がっている。

この鵯越地区から優に五キロメートル以上離れた神戸市須磨区内の海岸沿いに一ノ谷町という地名が残っている。浜辺のすぐそばまで山が迫り、急峻な斜面になっている。山陽電鉄の須磨浦駅から、ロープウェイに乗って標高約二五〇メートルの鉢伏山へ登ることができ、そこから更に同程度の高さがある鉄拐山に足を伸ばすことができる。



だから、『平家物語』の記述を素直に読むと、義経らは、鵯越の崖を駆け下りたところ、なぜか、そこから数キロメートルも離れた一ノ谷に出てしまったことになる。

どちらにも坂落しの舞台に格好の急斜面がある上、合戦に因む歴史的地名を残しているため、古くから、「坂落」の所在は論争になっており、果ては、神戸電鉄と山陽電鉄の両鉄道会社が、観光客誘致のために、自らの沿線こそが史実の舞台であると互いに主張し合ったようである。このあたりの事情は、筒井康隆が「こちら一の谷」（新潮文庫「メタモルフォセス群島」に所収）という短編で面白おかしく描いている。

いずれにせよ、現在の神戸市は、かつて、源平による激戦の地であり、当時、平家軍は、山が海に迫る神戸の細長く狭い平地部分の東西に陣を敷いていたようである。

私は、その中間地点に当たる場所に二年間住んでいた。現在の行政区画に従うと、神戸市中央区楠町という住居表示になる。この町名は、楠すなわち楠木正成に因んでいるようであり、歩いて数分の所には、楠公最期の地と伝えられる湊川神社が鎮座している。

つまり、この一帯は、南北朝時代、九州から攻め上ってきた足利尊氏の大軍を楠木正成が迎え撃ち、そして散っていった湊川の戦いの舞台でもある。

だから、奇しくも私は、中世の日本においてターニングポイントとなった二つの合戦場近辺で暮らすことになったのである。

勤務先からあてがわれた職員用の合同宿舎に入って間もなく、私は、少し風変わりな当番があることを知った。もちろん、それ以前に入居した職員用宿舎で、ゴミ置き場の掃除当番や自治会費を管理する会計当番などを経験したことはあった。そういう類の当番とは別に、この楠町宿舎には「榊当番」なるものが存在したのだ。

宿舎の敷地内にある駐車用スペースの脇に小さな祠が建っており、毎月二回、そこに供える榊を新しいものに交換するのが、その当番の主な仕事だった。当番が回ってきた者は、近所のスーパーで新しい榊を買い求めて取り替え、祠の内外を少しばかり掃除するのである。

その祠に関して特に興味を抱くこともなかったので、私は、祠の由来や歴史を古株の住人に尋ねたりすることはなかった。ただ、近隣の地元住民から厚く信仰されていることは、宿舎の人間から聞かされた。

楠町宿舎の周囲は住宅街になっており、近所には小学

校や国立大学の医学部、その附属病院などもあった。
一〇分余り歩けば、かつて平清盛が豪壮な別荘を建て、一時期遷都を強行したとも伝えられる福原である。関東人などは、「福原」と聞けば、清盛や安徳帝を連想するかもしれないが、現代の関西人にとっては、福原イコール風俗街である。だから、「福原へ遊びに行く」と言えば、「吉原へ遊びに行く」のと同じニュアンスが込められる。
それでも、福原周辺には「雪御所町」や「下祇園町」などの地名が残っており、かつてあった雅な香りの名残を留めてくれている。
そして、この福原の裏手、つまり搦手に当たる斜面一帯が鵯越地区である。
楠町宿舎の住人は、全て転勤族であったので、三年もすれば、ほとんどの入居者は、異動の辞令を受けて出ていってしまう。それゆえ、私と同様、その祠を有り難く思っている者は多くないように思われた。ただ、榊当番をサボると、近隣の住民から苦情が出るので、神経質と思えるほど、その当番は励行されていた。
あるとき、職場の懇親旅行で淡路島へ一泊旅行に出掛ける日が、丁度、私の榊当番の日に当たっていた。普段、私は、仕事帰りに買い求めた榊を夜中に替えていたが、この日は早朝に済ませ、心おきなく淡路島への車中の人となった。
ところが、その晩の宴会中に電話で呼び出された。宿舎の同じ棟に入っていた先輩の奥さんからで、
「もし、坂根さんが榊を替え忘れていらしたら、私が買ってこようかと思いまして」
「いや、朝に済ませておきましたから大丈夫ですよ」
というようなやり取りを浴衣姿の赤ら顔でした記憶がある。

その祠の脇には、一本の大きな楠が立っていた。
宿舎の住人によると、既に枯れているのだが、切り倒すことができず、そうかといって、万が一、通りがかった子供に枯れ木が倒れでもしたら大変なので困っているということだった。
「さっさと切り倒せばいいですやん?」
と階下の部屋に住む職場の先輩に言ったところ、
「そんな簡単なことではないんや」
という答えが返ってきた。
彼の奥さんが嫌味のない快活な方だったので、いつの間にか、この奥さんが宿舎の住人の要望を取りまとめ、それを彼が職場の総務課へ伝える形が出来上がっていた。

いつ倒れるか分からない危険な枯れた立木を放置しておく理由もないと思い、
「なんで、切り倒せないのですか?」
と尋ねると、先輩は、
「祟りだよ」
と吐き捨てるように答えた。
以前、同じように枯れた楠を切り倒したところ、この辺りの住人の間に不幸が複数起きたらしい。
「そんなの、きっと、何かの偶然やし、つまらん迷信にとらわれとったら、なんもできないですやん」
と言うと、
「そういう迷信かて無視できないんや。もしなんか起きたら、切り倒した奴のせいにされてまうしな。かなわんでぇ、そんなん。ほんま、やれやれやわ」
と本当に困ってるという顔になった。
楠町宿舎は、ワンフロアに二世帯の部屋が並ぶ四階建てで、これが双子のように二棟建っていた。
ここに住むようになって少し経ってから、私が入居した三階の部屋に住んでいた前の住人も、その祟りの被害に遭ったのかもしれない、という話を耳にした。
その話をよく知っているはずの宿舎の住人らは、私に気を遣ってか、誰も口にしなかったが、職場の同じ部署にいた少しおっちょこちょいの若い男性職員が、何かの折りに面白そうに話してくれた。
その住人は、癌か何かに冒されていたようで、発見・手術した際には、既に手遅れであったそうである。
「いやぁ、あの部屋には、お線香あげに行きましたわ」
「でも、その病気は、彼が楠町宿舎に入る前から進行していたことになるわけやろ? たまたま、楠町にいるときに亡くなっただけなんやから、別に、祟りのせいで発病して亡くなったわけではないやん」
「楠町におったから、発見が遅れたとかっちゅうことやないですか。まぁ、わしにも、どないな祟りなんかは、よう分かりませんけど」
職員が亡くなると、宿舎に同居していた家族は、原則、速やかに退去することになっている。だが、その奥さんは、彼との想い出の部屋に愛着を感じていて離れ難かったことから、総務課と何らかの交渉をして、その後も一年ほど、その部屋に住み続けたらしい。それでも、名残惜しいということで、奥さんは、その部屋を望める近くのマンションに部屋を購入し、そこへ越していったとのことである。
その後、私がその部屋に入居したということになる。
そんな奥さんの素敵な想い出を壊しては申し訳ないと

思い、このエピソードを聞いてからは、洗濯物は室内に干すようにし、ごくたまに布団を天日にさらすとき以外はベランダに出ないようにした。

「あの部屋、線香臭くないですか？　こんな話を聞いて、気味悪く思わんといてくださいよ、あははは」

と無邪気に笑う男性職員の横で、その上司の年輩職員が「余計なこと話しやがって」というような苦々しい顔で、申し訳なさそうに上目づかいで私を見ていた。

しかし、一体、何が気味悪いというのか。

前の住人が病で亡くなった、というだけのことである。

これまで、日本国内で、いや、兵庫県内で、神戸市内でだけでも、どれだけ多くの人が死んだのだろう。累計すれば、少なくとも何億、何十億という人間が死んでいるはずである。そのことに思いを致せば、死者が生前に本拠を置いていた地や死人が出た場所などは、至るところ、それこそ星の数ほど散らばっている。それらをいちいち忌み嫌い、気に懸けて、一体どうしようというのか。第一、そんなことを気にしていたら切りがないであろうし、私には、滑稽なことのようにさえ思える。

誰もが皆、屍の上で生を営んでいるのである。

「いや、ええですか、みんな、誰かが死んだ土地の上に住んでいるんですよ。それが最近のことか遠い昔のことか、近しい人か赤の他人かという違いはあるにしても、人類の歴史を考えれば、そんな違いは、誤差みたいなもんでしょうが」

枯れた楠の処理で困り顔の先輩に言ってやった。

「だったら、どうだって言うんや？」

と少しムッとした顔で切り返してきたので、

「とっとこ、楠なんて切っちまえばいいんですよ」

と挑発するように言ってみた。

「お前、簡単に言うけど、もし、なんか起きたら、どないすんねん？『また祟りが起きた』って大騒ぎになるんやでぇ」

「そんなもん、なんか起きたって、それが祟りかどうかなんて、誰にも分からないですやん？」

「いやいや、普段、俺らが扱ってるような、そんな冷静な因果関係の問題やないで。ここらの住人の感情の問題なんやからな」

「だったら、このまま楠を切らずにおいて、もし、枯れ木が倒れて幼児が下敷きになって死んだりしたら、どないすんですか。その幼児こそ、きっと誰かに祟るんとちゃいますか。ぐずぐずして楠を切り倒さなかった先輩

あたりが、真っ先に祟り殺されたりして」

「お前なぁ……」

「だいたい、ここで起きた阪神・淡路大震災で、六千人以上が亡くなってて、その中には、家屋の下敷きになったまま、無念のうちに焼け死んだ人が少なくないわけでしょ。そういった土地の上に、家やアパートを再建して暮らしてる人ら、祟り殺されてますか？」

「お前、あんまり生々しい話すんなよ。ここらにも、家族をなくした被災者が住んでたりすんだからよぉ。俺らみてぇに他所から来て他所へ出ていく人間は、あんまり突っ込んだ論理を振り回す必要なんかねぇんだよ」

「この辺りは、源平合戦や湊川の戦いとか有名なものだけ挙げても、もの凄い数の人が死んでますやん。それらの怨念を考えたら、神戸市中が祟りの名所にならなぁおかしいんとちゃいますか？」

「そんな、大昔の話なんか、関係ねえだろうが」

「じゃあ、ごく最近の話にしましょうか。ここの裏手にある医学部の解剖室でのことを考えたら、もっと凄い祟りが起きててもおかしくないと思うんやけどなあ」

「お前、そんな余計な話、奥さん連中にすんなよ。気味悪がるだけで、何の意味もねえんだからな」

「分かってますけど、何にも知らないで、『祟りだ、祟りだ』って馬鹿の一つ覚えみたいに口にする連中が、アホみたいで、付き合ってられないんですわ」

私たちは、仕事柄、宿舎近くの医学部にある法医学教室を訪れ、地下室で行われる変死体の司法解剖に立ち会うことがあった。

肋骨を引き剥がされ、内臓をえぐり出され、頭蓋骨をぱっくり開けられ、体内のあらゆる箇所を赤の他人の手で触られ、切り刻まれる運命になった者こそ、世に祟り出る資格があるのではないか。

「大昔とか、最近とか、だいたい、祟りに有効期限みたいなもんがあるんですかね。祟りって執念深そうやから、どんどん堆積して、日本中が祟りだらけになって、国民みんなが祟り殺されるんやないですか。そうやって祟り殺された人間の怨念も祟りになって、切りがないですやん、やっぱり」

「誰もが、お前みたいに考えてるわけやないんだから、そう簡単に割り切るわけにはいかねえんだよ」

「でも、そんなに難しい話やないと思いますけど。祟り殺された者の身になって考えれば分かりやすいでしょ。そいつは、きっと、自分を祟り殺した奴に恨みを抱くわけやから、そいつに祟ろうとして、で、祟り同士が相討つことになるわけで……」

「もうええよ、祟りの世界の話は。俺は、こっちの世界の話で頭が痛いんや。『子どもたちが楠の下敷きになったらどうすんの！』って、わぁわぁ喧(やかま)しい奥さま連中と『祟りが出たら大変だ！』としか言わない近隣連中の板挟みなんだよ。分かるか、こんなことで頭悩ますために俺は神戸に転勤してきたんとちゃうのになあ」

と溜め息まじりに言う先輩が少し気の毒に思えてきた。

「だったら、俺が楠を切り倒しますよ」

「へっ？」

「訳ありのあの部屋に俺を入居させたの、俺が家族を持ってないからでしょ。俺の身に何か起きても、俺だけで済む問題ですからね。一本といわず、楠の五、六本くらい、いつでも俺がまとめて切ってやりますよ」

「おい、おい」

「大丈夫っすよ。俺は祟りなんかでは死なないですから」

「なんで、そんな自信あるんだ、お前」

「祟りって、信じない人には無力なんですよ、きっと。信じる人が殺されるんですよ。なんか変な話やけど。試してみませんか、俺で」

結局、その楠は、切り倒されないまま二年が経ち、私は他所(よそ)へ異動したので、その後の動静については知らない。神主を招いて御祓(おはら)いしてもらってから業者に処理を依頼しようという案でまとまりかけていたので、もう既に切り倒されたのかもしれない。

今でも、通りがかった公園などで楠の大木を目にすると、あの楠町宿舎の枯れた老木が思い出される。

幸い、今住んでいる横浜は、神戸と異なり、かつて大きな合戦場になったことはないようだし、今のところ、祟りの噂を耳にすることもない。実は、この点こそが、両者の最大の違いではないかと私は考えている。

現在、横浜では、折しも開港一五〇周年を記念するイベントが行われている。つまり、横浜は、歴史の表舞台に登場するようになってから、まだ一五〇年しか経っていないのである。この間、かつての東海道神奈川宿近くで生麦事件が起きて英吉利(イギリス)人が殺傷されたり、開港後間もない横浜で血気盛んな攘夷の志士らの犠牲になった外国人はいたようである。

しかし、英国人らが祟って出たなどという類の言い伝えは、寡聞にして知らない。最後の審判を受けなければならない彼らにとって、死後、祟りなどという所業に出て、子孫たちが住む世界に害を及ぼすことなど考えもつかないことなのだろうと思う。

宗教や思想は違えども、子孫を思う気持ちにおいては、日本人も、そう劣ることはあるまい。

文人

第 51 号

The Literati No.51 2009